

## 中京大学英米文化・文学会 春季大会特別講演会

「ウィリアム・フォークナーと三島由紀夫の  
小説における自然、文化、そしてジェンダー」

"Nature, Culture, and Gender in the Novels  
of William Faulkner and Yukio Mishima"

クリストファー・リーガー (Christopher B. Rieger) 氏

2018年6月5日午後1時10分より、中京大学名古屋キャンパス5号館523教室にて、国際英語学部英語圏文化専攻との共催で、合衆国サウスイーストミズーリ州立大学教授で、同大学フォークナー研究センター所長でもあるクリストファー・リーガー氏を招いて春期特別会が開催された。

リーガー氏は合衆国でも屈指のアメリカ南部文学研究者で、特にノーベル文学賞受賞作家であるウィリアム・フォークナーの専門家である。これまでもフォークナー研究書である *Clear-Cutting Eden: Ecology and the Pastoral in Southern Literature* を始めとする多くの著作があり、今回は日本への研究講演旅行の一環として、中京大学英米文化・文学会のために、三島由紀夫とフォークナーとの比較研究に関する講演を行った。

20世紀前半から中盤にかけて活躍したアメリカ人作家と、戦後の日本文学の一翼を担った三島とを比べるとというのは一見ミスマッチのようにも思えるが、リーガー氏は両作家が共に抱える、自国の伝統と文化に対する矜持とその喪失に対する慙愧の念とが、時代と

国境を越えて普遍的な文学的主题を提示しているという斬新な仮説を提示する。フォークナーと三島は、ともに「遅れてきた作家」である、とリーガー氏は指摘する。彼等はともに自身の「男らしさ」を証明しようとする伝統的な男性像を追及しつつ、その最大の機会である「戦争」に参加する機会を生まれながらに失っていた——フォークナーにとっては第一次世界大戦、三島にとっては太平洋戦争が、それぞれの「失われた」戦争である。そのために、自己の男性性に対する絶え間ない不安とフラストレーションとを抱えつつ、彼等はその懊悩を文学作品へと昇華する。

一方で彼等がある種の救いを求めたのが、文明の外にある自然であり、それを象徴する女性であった。女性は彼らの創作において自然の摂理と結びあわされており、少女から大人の女性へと成長し、成熟して出産に至る女性の変容の過程に、両者は男性性の限界を超えた変化と回帰の一連のプロセスを見出す。それは男性にとっては捉えどころのない謎であるとともに、絶え間ない憧憬と崇拜の対象でもあった。

いうまでもなく、こうしたフォークナーと三島の「保守性」は、現代的な観点からは批判されるべき点も多いが、リーガー氏は文学がそうした保守性や伝統に対する執着をも併せ呑んで昇華させるという意味で、個別の時代や地域を超えた主題を扱いえるのだと述べて、なぜこれらの作家がいまだに読み継がれ、今後も読み続けられるべきであるかという問いに答えてみせた。非常に有意義でもあり、刺激的な講演であった。

本講演には、学部学生や大学院生を始めとして、国内外の著名な文学研究者を含む多くの一般来聴者も参加し、その聴衆は百名余に及んだ。講演の最後では活発な質疑も交わされ、盛況のうちに終了した。

(中京大学国際英語学部英語圏文化専攻教授 森有礼)